優秀賞

障がい者と共に生きる

松江市立東出雲中学校　2年　仲野莉杏

私の家族には障がいのある叔母がいます。叔母の障がいは知的障がいです。叔母は、私たちと一緒に生活しています。

私はこれまで、障がいのある人と一緒に暮らす機会がありませんでしたが、実際に一緒に生活してみると思っていたよりも大変だと思いました。叔母は実年齢よりも知能の発達が遅れています。同じことを何回も繰り返したり、自分で言ったことを忘れてしまったりします。また、突然大きな声を出すこともあります。ことばでの意思表示ができないので、私は叔母の気持ちをつかむことが難しいです。食事にも気をつけなければいけません。固形物はのどにつまらせてしまうので、私たちとは違った食事の内容になります。他の人と違う食事であるので、叔母は、他の人が気になって自分の食事に集中できません。障がいには身体的な障がいや情緒に関する障がいなど様々な障がいがあります。今夏はパラリンピックが行われていますが、様々なハンディキャップのある人の活躍を見ながら、私はもっと身近なところで、多くの人が障がい者の問題について考えることから始めていかなくてはいけないと思っています。

私の父は、障がい者や高齢者が入所する介護施設で働いています。介護の仕事で最も大切にしなければならないことは、何よりも人を大切にし、みんな平等に接することだと父は話します。しかし、残念なことに障がい者や高齢者に対して「気持ち悪い」「変なの！」というような心無いことばが聞こえてくることが多々あるということです。相手のことを考えない人が増えてきていると父は悔しそうに話してくれました。

どうしてこのようなことばが社会の中で飛び交うのでしょうか。「気持ち悪い」と思う基準はどこにあるのでしょうか。それは、残念ながら、自分基準でしかありません。他者を意識しない、できない自分本位の考え方であると思います。このような考え方が差別や偏見、暴言や排除を生むのだと思います。

人権はすべての人に平等にあるものです。だれもが人権についてきちんと理解し、考え、行動しなければなりません。私は、今、叔母を通して改めて障がいについて考えました。私たちの生活の基準がいわゆる「健常者」にあるから、障がい者は不幸だとか何か違うというような見方をしてしまっているのでは、と思います。例えば、身体が不自由な人にとって歩きにくい道路、段差、信号機、テレビやスマホ

の情報、少し意識すれば、障がい者の立場への配慮がないと思うことがたくさんあります。障がい者にとって、それは不幸ではなく不便なことです。不便さは社会で補い合わなければならないし、制度やしくみは変えなければいけません。そして最も大切なことは社会や私たちの意識を変えることだと私は思います。

先日、ニュースで五年前、神奈川県相模原市の障がい者施設で起きた事件について報道されていました。私はちょうど障がい者の人権について考えていたこともあり、この事件について調べてみました。逮捕された被告の写真も見ました。警察車両の中でほほ笑んでいるかのような顔をしていたことが、私には信じられませんでした。許せないと思いました。意思の疎通ができない人間は生きる意味がないと言った被告の発言の意味がわかりません。亡くなられた多くの方も、そしてその家族も決して受け入れられるものではないと思いました。この事件はとても衝撃的でしたが、この事件をめぐって、もうひとつの課題があることも知りました。それは、被害者の氏名、名前を語っている遺族が少ないということでした。施設には慰霊のモニュメントができました。しかし、そこにある名前は本当に少なかったのです。このことは障がい者の人権、尊厳、生きた証という点で考えられないことだと思いますが、名前の公表を家族が認めることができなかった背景は何なのかということを考えると、障がい者の問題の重さ、深刻さをつきつけられたように思いました。それは、私が障がいのある家族とともに暮らし、思っていたより大変だと感じたこととは比べられないかもしれませんが、私もそうであったように、家族もまた大きな苦しみや葛藤、不安とともに生きているということだと思います。

障がい者もみんな同じ人間です。何も変わりありません。みんな平等に接することが大切です。家族にとって、様々な苦労があることは私も知っています。でも、隠したり、恥じたりはしません。それが、私が叔母から学んだことです。

私自身の行動を見つめ直し、それぞれの人の立場を尊重し、思いやりの気持ちを持つことが、障がい者だけでなく、だれもが気持ちよく、そして豊かに生活できる第一歩だと思います。私はこれからも叔母との関わりを大切にしていきたいと思います。